

# アンケート調査の両義性

——C.W. Morris の人生観・価値観調査を手掛かりとして——

東京大学大学院 見田朱子

## 1 目的

この報告の目的は、アンケート調査という手法が本来もっている両義性を明確にすること。これによって、幾つかの社会学研究上の問題状況とその改善策を指摘すること。この2点である。

アンケート調査の両義性とは、収集できるデータが量的データと質的データの両方とも可能であるという性質である。理屈としては同意されるかもしれないが、実際の状況として、アンケート調査は量的分析を前提として設計、実施、結果のデータ化とその保存がなされている。ここで質的データとは、単にサンプルの性質や調査実施の季節などといった「注意を払うべき、データの背景」ではない。質的データの収集の質問項目が設定可能であり、アンケート調査は質的データ収集の手法としてより実践的に検討されるべきだと主張したい。

また本報告で指摘する社会学研究上の問題状況とは、一つには量的／質的という二分法が、データの収集や分類および分析手法上「仕方なく」「便利に」存在するという状況。もう一つには、探索的分析の重要性があまり意識されていない状況である。

## 2 方法

本報告の目的のためには、理論上の可能性よりも実践的な手法と実際的な利点を示すべきであろう。また示すべきは特に、質的アンケート調査の手法と利点であろう。従って本報告では、1940～50年代に行われた、C. W. Morris の人生観・価値観の調査研究を手掛かりにこれらを検討する。

## 3 分析内容

Morris の調査および分析の特徴は、以下のような点にまとめられる。①自由回答欄の活用。②大幅な選択肢の変更（むしろこれが目的とも思える）。③ある程度高度な読み書き能力の前提。④量（統計）的データ処理。⑤人生観や価値観の調査に適した方法。

## 4 結論

以上をまとめると、質的アンケート調査が可能であることと同時に、以下の a)～e)の点が指摘できる。a)質的アンケート調査は選択肢の質と自由回答欄の活用によって可能である点。特に自由回答欄はショートインタビューの積み重ねにちかく捉えられる。b)質的アンケート調査から得られたデータは、探索的分析にとって非常に有意義である点。c)量的分析と質的分析の、同一調査・調査票内での往復が可能になる点。ただしこの方法は、d)回答者のある程度高度な読み書き能力を前提としている点と、e)調査テーマによって適合度が大きく異なる可能性がある点に注意が必要である。

これらによって、量／質の総合的考察の過程と、探索的分析の過程とが実践的に示される。

## 文献

Morris., C. W. 1956, Varieties of Human Values, The University Of Chicago Press.